

聖騎士の牧場

The Holy Knight Farm

→ 家畜に堕ちた戦姫たち →

上田ながの

[挿絵] A.S.ヘルメス

立ち読み版



18
未 満

二次元ドリームノベルズ



登場人物紹介

Characters



ノノン＝クルザス

幼い容姿に反して200歳を数える副騎士団長。フェリアの育ての親でもある卓越した魔法の使い手。



フェリア＝アルガスタ

聖ガブランド王国に所属するアルガスタ騎士団の騎士団長。カールラント王子と恋仲だが身分差が障害となっている。

**カールラント=ロブイナス=
ラ=ガブランド**

ガブランドの王子。現国王が病床に伏しているため実質の王国最高権力者。



アルト=モドゥーナ

騎士団随一のグラマラス体型を誇る女騎士。自由人で男勝り。身の丈ほどある巨剣を操る。

バガルド=アズスク

聖ガブランド王国の宰相。国の危機を憂い、亜人騎士を人間家畜化する計画を立てる。



リナ=アートランド

フェリアに憧れる新人騎士。従順で家事など身の回りの世話を得意としている。

一章 亜人騎士団

二章 身体検査

三章 家畜

四章 魔物

五章 絶望

007

060

112

165

217

騎士達の悲鳴にコスタルは嬉しそうな表情を浮かべると共に――

「そ、それじゃあ……本番を始めるんだな」

そう告げてきた。

「……本番？ 何を……何をするつもり？ 皆に……皆に手を出したら許しません。許さない！ バガルド――王国宰相といえど斬る!!」

「……怖い顔ですね。ですが、そんな顔で睨んだところで無駄です。これはガブランド――国の決定なのですから。貴女方も我が国の騎士であるのならば、大人しく受け入れて下さい」

「国の決定!! 殿下が留守にしている隙を狙つての卑劣な行為が国の決定!! 馬鹿なことを言うな!!」

馬鹿げている。受け入れることなどできるはずがない。

だから叫ぶ。殺気を込めた言葉を宰相へ向ける。

しかし、叫びは虚しく響くだけだった。

「で、でで……では、まずは騎士団長殿の身体検査からは……始めさせていただきます。けっへ、けへへへへ」

そして、コスタルによる身体検査が始まる。

*

「これが……き、騎士団長殿のおまんこかあぁ」

椅子に座ったコスタルが、マジマジとフェリアの秘部を見つめてきた。見られるだけで身体が汚けがされていくような気さえする下品な視線だ。はっきりいっておぞましい。

が、この視線から逃げることはできなかった。

身体を兵によって拘束されてしまっていたから。コスタルの前に、両腕を拘束された上、足を大の字に開かされるといった状態で……。

当然の様に尻尾も押さえられてしまっており、秘部を隠すことができない。

そんなフェリアの秘裂に向かつて、コスタルが手を伸ばしてきた。

「や……やめろっ！ 触れるな！ 私に触れるなっ！！ そこは……そこは貴様の様なものが触れてよいところではないっ！！」

このような醜い男に大切な部分に触れられる。あつてはならないことだった。そこに触れていいのはただ一人だけ——。

「貴様あ！ フェリアに手を出すでない！」

「殺すっ！ 必ず殺してやるっ！！」

フェリアの危機に仲間達の声が上がる。全裸状態で拘束されながら、まるで順番待ちでもするように一列に並べられた仲間達の声が……。

が、コスタルは止まらない。そうすることがごく当たり前とでもいう様に、秘裂に触れると、クパツと指で大切な部分を容赦なく左右に開いてきた。

鮮やかなピンク色をした柔肉が露わとなる。未だ誰一人——愛しいカールラントすら迎

(は……挿入^{はい}ってる？ 私の……わ……私の腔中^なに……ゆ、指が……こんな……こんな男の指が……)

ただし、あくまでも指先でしかない。それでも、下腹部には異物感を覚えたし、身体中に鳥肌が立つ程のおぞましさも感じた。全身が穢^けされていくような気さえする。

「ぬ……抜けっ！ 何をしている！ 抜けえっ！」

慌^{あわ}ててもがく。この状況から脱しようと足掻く。

「暴れないで下さいフェリア様」

が、兵達は拘束を解いてはくれない。

「放せっ！ 放せえっ！」

「……けへへ……う、五月蠅^{うるさ}い牝^めなんだな。だが、活きがいい方がお……面白い。さ、さあいくぞ。お前の……に、妊娠^{うらみ}度^さチェックだ！」

ニタアツとコストルの口元が歪む。それと共に醜^{みにく}い男の身体から異常なまでの――

(ま、魔力？)

を感じた。

魔力などなんの為に？

思考が混乱する。

その混乱を突くかのように、挿入された指先を通じて――

「くひっ！ あっあっ――ああああああ！」

バチバチと電流の様な魔力が、フェリアの肉体に流し込まれた。

「かつは……あふあああああつ！」

ビクビクツと肉体が激しく震える。

(なんだ……私は……何をされているうう!!)

「あつあつ……あうあああああ」

自分の身に何が起きているのか？ さっぱり理解できないまま、流され続ける魔力にフェリアはひたすら悶え続けた。

「あつふ……はあつはあつ……な、何をした？ 貴様……私にな……なに……を……？」

しばらくして魔力波が落ち着く。狼耳の亜人騎士は何度も肩で息をしつつ、コストルを睨んだ。

「なに？ こ……こういうことなんだな」

問いかけに対してコストルはそう呟くと――

ぐじゅっ！ にゅじゅうううっ！

「なっ！ んっひ！ くひいいいっ！」

ゆっくりと円を描くように指を蠢かせてきた。腔壁を醜い男の指がなぞる。

「あつく……んっんっ——んんんんん!!」

途端に全身に痺れる様な刺激が走った。

(ど……どうということ？ な……なに？ これは……熱い……熱くなる。あそこが……わ

……私の大切な部分が熱く)

同時に下腹部が燃え上がりそうな程に火照り始める。更に、ズキズキと秘部が疼き始めるのも感じた。

「な……なんだ？　これは……あつあつ……な、何を……んんん……私に……な……にをおおお」

ほんの少し指が動くだけで、膝がガクガクと笑うように震える。全身が脱力していく。指の蠢きに合わせて「あつんっ……はあつはあつ」と、熱い響きの混じった吐息が漏れた。

この感覚——フェリアはこの感覚によく似たものを知っている。

あの日、祝勝会の夜、カールラントと共にした行為で感じた感覚にそっくりだった。

(でも……何故？　どうして？　相手は……殿下じゃない……こんな……こ……んな男なのに……)

理解できなかった、これは現実なのか？　もしかして夢でも見ているのではないだろうか？　とさえ思ってしまう。

けれど、下腹部に感じる感触は本物だった。

しかも、ただ感じるだけではない。はっきりと指の形まで腔壁を通して認識することができてしまつてさえた。

醜い男の指が、柔肉をなぞり、擦り上げてくる。ほんの少し指を動かされるだけで、ピクピクッと自然と身体が震えてしまった。

ぐちゅっ……。ぐちゅっぐちゅっぐちゅう……。

秘部からは淫猥な音色まで響き始める。

「濡れてきたぞお」

「ば……馬鹿な！ 嘘をつくな！ き……貴様のよ……んっんっ……ような男をあ……相手にぬ……濡れる？ そんな……そのようなこと……」

あるはずがない。あつていいはずがなかった。

「言葉でも否定しても……む……無駄なんだな。実際俺の……くけけ……俺の指はお前のまん汁でグシヨグシヨだあ。だが、恥じる……ひ、必要はないぞ。お前が感じてしまうのは、ととと……当然のことなんだからなあ」

「当然の……こと？ ど……どういう意味!!」

「そのままの意味だ。お前の身体は……お……俺の魔法で敏感になっているんだな」
前置きと共に説明を始める。

「肉体を敏感にして、お前らを絶頂させる。簡単に絶頂く牝はすぐに堕ちる。だから妊娠しやすいCランクなんだな。ちよつと耐える牝はBランク。こいつはなかなか妊娠しないで、絶頂かずに耐える牝はAランク。特上なんだな」

肉壺への刺激を続けながらの語りだった。

「お前ら獣は……くひひ、精神力が強ければつ、強い奴程、より強力なち、力を持った子を産む。さて、お前のランクは幾つかなあ？ 絶頂きたくなったら……い、いつでも絶頂

つていいからなあ」

「な……なにを巫山戯たことを！　い、絶頂く？　私が？　あり得ない！　あ……あり得ません!!」

これまでフェリアは一度しか達したことがない。カールラントとのあの夜でしか……。だからこそ、こんな男に絶頂かされたくなどない。絶頂かされるわけにはいかない。カールラントとの思い出を穢さない為にも……。

ぐっじゅ……。ずじゅっ……。にゅじゅううっ。

「んつく……。むふうっ……。ふうっふうっ……。くふうう」

だからフェリアは耐える。淫靡に指が蠢くたびに、秘部の疼きがより大きくなっていくのを感じつつも、ひたすら性感を抑え込み続けた。

（私は……私のすべては……殿下のも……のよ……だから、こ……このような男な……どこにいいい！）

堕ちない。絶対に屈したりはしない。

愛液がトロトロと溢れ出し、コスタルの指を濡らす。剥き出しになった陰核が、刺激に合わせる様に勃起していく。身体中から汗が分泌され、乳首までも硬く痼り始めてしまう。「んんん……んんんっ……んんんん」

自然と指の動きに合わせて腰を振ってしまう自分さえいた。ねつとりと愛液が糸を引く。ただ、それでも、フェリアは耐える。口唇を閉じ、必死に性感を抑え込む。

「へ……へえええ。ちょ、ちょっと驚いたんだな。ここまでされて耐えるなんて、流石は騎士団長なんだなあ」

「だ……黙れ……この程度……た、耐えられてと……はあはあ……当然……です……」

「ふむ……これは楽しみ甲斐のある極上の牝なんだな。よし……お、お前のランクはAだ。お、おい」

そう言うときスタルは膣中から指を引き抜くと、フェリアを拘束している兵達に声をかけた。

これに兵達は露骨に不愉快そうな表情を浮かべつつも、ズルズルとフェリアを引きずり始める。

「な……なにをつ!!」

「こういう命令ですから……お許し下さい」

謝る兵士達によって地下牢床に四つん這いにさせられる。同時に、兵達の手でフェリアは首輪を嵌められ、牢内に用意された杭に繋がれることとなった。

その上更に――

「な……なに……それは？」

兵が長い鉄の棒をどこからか用意してくる。鉄の棒の先端部は熱を持っているのか、赤く染まっているように見えた。

なんだか嫌な予感がする。

「何を……何をやる気？ やめ……それを……私に近づけないで！ 正気に……正気になりなさい！」

だから必死に訴えるのだが兵は止まらない。彼は鉄の棒の先端部をフェリアの尻へと向けると、それを押しつけてきた。

ドジュウウウウッ！

「ひっぎ——ぎひやあああああつ！！」

途端に凄まじい熱気がフェリアを襲う。

「あああ……熱い！ あついいいいい！ あぎつ……んぎいいいいいっ！！」

尋常でない熱に、数多の戦場を駆け抜けてきたフェリアでさえも悲鳴を抑えることができなかつた。

「なっ！ お、おいっ！ フェリア様が苦しんでいるぞ！ どういうことだ!! 痛みは感じないのではなかつたのか？」

この様子に鉄棒を押しつけた兵士自身が動揺し、コスタルを糾弾し始める。

「大丈夫なんだな。お……俺の魔力を込めてあるから、痛みはすぐ消える。辛いのは最初だけ……少し経てばその熱気さえき……きも……気持ちよくなるんだな。け……けへへへ。ほら、実際気持ちよくなってきただろう？」

悶えるフェリアにコスタルが問いかけてくる。

「熱い！ ああああ！ あづいいいいい！」



が、返事をする余裕はない。

ひたすら、ひたすらフェリアは悲鳴を響かせる。

あり得ない。気持ちよくなることなどあり得ない。こんなのはただ辛い、辛いだけでしかない……。

しかし、そのはずなのに――

「んっひ！ な……なんだ？ あああ……これは……こ……んっんん！ こ……これはなんだあ！」

グジュアツと鉄棒を尻から離されてしばらくすると、全身を襲う痛みが引いていく。いや、それどころか、先程腫を弄いじられていた時に感じた性感を数倍にしたような刺激がフェリアの肉体を襲ってきた。

「んっひ……くひいっ！ んっんんん！」

それこそ、達してしまいそうな程強大な肉悦が全身を駆け巡っていく。

「ほら……絶頂きたいなら絶頂っていいぞ」

それに気付いているらしいコスタルからの言葉が向けられる。

だが――

（駄目よ……耐える！ たえ……るのよおお！）

「んふうう！ ふうっふうっ……くふうううう！」

絶頂くわけにはいかない。

耐える。耐える。耐える。

(殿下！ 殿下あああつ!!)

愛しい男のことを考えることで、フェリアは肉悦を抑え込んだ。

「んっふ……はあつはあつはあつ……」

何度も荒い吐息を吐く。

「ほう……た……耐えきるとは……これは特Aクラスとい、言ってもよさそうなんだあ」

「だ……だま……れ……黙れええ……」

未だ身体中が熱い。だが、それに耐えつつ殺気を飛ばす。

「怖い怖い……。だが、首輪を嵌められて……し、ししし……尻にそんな焼き印をされた状態で凄んでも、ま、間抜けに見えるだ……だけなんだなあ」

ゲラゲラコスタルは笑う。

彼が言う通り、フェリアの尻にはAという焼き印が刻まれてしまっていた。まるで出荷

前の家畜のように……。

「うつく……くううう……」

(酷すぎる……こんな姿……。殿下に……殿下になんと言えは……)

カールラントに対する申し訳なさで、心が碎けてしまいそうできえあつた。

怒りと屈辱で全身が震える。

ただ、その間でも刻まれた刻印がジンジンと疼く。どうやら刻印自体に魔力が込められ

「その声……随分気持ちよさそうだね」

「ち……がう！ 私は……そんな……そんなこ——」

どじゅぽつ！

「あふああああ！」

言葉の途中であつても容赦などしてもらえない。膣奥を叩くように肉槍が突き込まれる。強すぎる刺激が走る。一瞬目の前が真っ白に染まった。それと共に身体中から力が抜けそうになる。

苦痛ではない。明らかに快感を伴った感覚が身体中を駆け巡っていた。

（な……なにこれ？ う……嘘……きき、気持ち……気持ちいい？ 私……感じて……う、嘘……嘘！ 嘘です！ 嘘オおお！）

そんな自分が信じられない。信じたくなかった。

「ほら、気持ちいい」

「違う！ 違います！ 違う！ 違ううっ！」

「それでも？ これでも違うって言えるのかい？」

必死の否定——しかし、そんなものに意味はなかった。寧ろ男を喜ばせる結果にしかない。

「んひいいっ！ くっひ！ あんっあんっあんっ……あんんん！」

自身の存在を刻みつけるように、男は腰を振ってくる。肉槍で膣奥を突きつつ、ふたな

りペニスを激しく扱いてくる。

「だつめ！ あああ！ 駄目！ 変になる！ こんな……あつあつあつ！ こ……んなにされたら……おかひくなりゅ！ なんか……なんかきちやう！ やめて！ やめて下さい！ もう！ ほんとに……あああ！ これ……私が……私でなくなっちゃう！ やめてえええ！ 怖い……怖いからあ！」

身体の奥底からこれまで感じたこともないような強い感覚がわき上がってくるのを感じた。身体検査で無理矢理絶頂させられた時よりも強い感覚が……。

それが怖い。ただひたすら恐ろしい。

だから許しを請う。何度もやめてくれと訴える。

「怖がることなんかない。感覚に身を任せるんだよ。そうすれば最高の快楽を得られるから！ さあ、絶頂くんだ。俺に絶頂くところを見せて！」

ぐじゅつぽ！ どじゅ！ ぶじょおおお！

止まらない。止まってくれない。

「くひいいい！ お、大きくなってる！ わだ……わだぢのながで、おぢんぢん大きくなつてりゅう！ それに、私の……私のおちんぢんも熱くなってる！ これ……駄目！ もう……止められない！ わたひ……もうっ！ もうううう！」

抑えがたい程に、どうしようもない程に、絶頂感が膨れ上がっていく。

「俺もだ！ 俺も射精すよ！ だから……さあ、絶頂つて！ お嬢ちゃん！ 絶頂くん

だ！」

「駄目！ あああ！ 駄目！ 駄目駄目……駄目ええええええ！」

悲鳴が響き渡る。

ずじゅぽっ！

「くひいいっ！」

刹那、これまで以上に膣奥まで肉槍が突き込まれた。同時に亀頭が膨れ上がり――。

どびゅぽ！ ぶびゅううう！

「ふひいいい！ で、射精てる！ あづいのが！ あじゅいのがながに……ででましゅう

う！ これ……あああ！ い、いいっ♥ 気持ちいいい♥」

多量の熱液が膣中に撃ち放たれた。

「いいでしゅ！ これ……気持ちよすぎて……絶頂く♥ 私……もう……絶頂っちゃいま

す♥ おおおお！ 射精る！ 射精るっ！ し……射精……射精しながら……いぐっ！

いっぎゅううう♥♥♥」

びゅっぶっ！ ぶびゅぽあああ！

快感が弾けた。

思考が白く染まっていく。牝の部分と牡の部分、二つの性器でリナは絶頂に至った……。

「はっふ……♥ はふうううう……♥」

身体中が心地いい気息さに包み込まれていく。リナは幼さの残る肢体を幾度となく震わ

せた。このまま瞳を閉じてしまいたい。眠ってしまいたい——と思える程の心地よさを感じながら……。

「まだだぞ。選交代だ」

だが、休む暇など与えてはもらえない。

「へ？ え？ な……なにを……あ、嘘……嘘おおおお！ 駄目……だ——」

ぶじゅうぽっ！ ずじゅううっ！

射精を終えた男が自分から離れたと思った瞬間、新たな男の肉棒が、容赦なく膣中に突き込まれた。

「ふひひい！ まった！ おおおおお！ また、挿入って……挿入ってきたああ♥ ど、

どうじで？ にやんで？ にやんでえええ!!」

「何故って……も……目的はお、お前の妊娠なんだな。だから……孕むまで続く。お前が子を生すまでな。けへ……けへへへへ」

陵辱行為を監視していたコストタルが、実に楽しげに笑った。

「うぞ……うぞおおお！ もう……や、めで……やめでえええ！」

ポロポロとリナの毗から涙が零れる。

だが、泣いたところで意味などない。

「さあ、いくぞ！」

ずじゅうぽっ！ どっじゅう！ ずじゅううっ！

「ふひいいい！ あっあっ——ふひあああ♥」
更なるピストンがリナを襲う……。

*

アルトが、リナが犯されていた。城の皆の前で、仲間だった兵達に……。
いや、二人だけじゃない。

「くっふ……んふうう……。ふー。ふー。ふー……。あ、後で……必ず後悔させてやるぞ。
ワシを辱めたことを……必ず……悔いさせてくれる……」

ノロンをはじめとする——

「ふひいいい！ もう……許して……許してえええ！ あんっあんっあんんん！」

「奥まで……奥まで来てます。あああ！ 大きいおちんちんが奥までえええ！」

「イク……。これ……。イク……。♥ んっんっ……。んふううううう。♥♥♥」

他の騎士団員達も皆、兵達によって肉壺を蹂躪されていた。

「なんか……こうやって見てると……本当に家畜みたいだな。流星になんか酷すぎる気がする……」

「確かに。実家でやってる種付けを思い出すぜ」

「でもさ、これも国の為だ。魔物を滅ぼす為だ。それに……亜人にはこういうの……やっぱり似合ってるよな」

「ああ、それは言ってる」

その光景を城の人々が見つめてくる。視線を逸らす者もいれば、興奮した表情を向けてくる者もいた。ただ、誰もがこれを受け入れている。英雄と称えてきた騎士達を誰も救おうとはしない。

「何故……どうして……」

フェリアには信じがたい光景だった。

「何をしたバガルド！ 皆に一体何を吹き込んだのですか！」

仲間達同様牛舎に囚われた状態で、バガルドを睨み付ける。

「別に何も吹き込んではいませんよ。それだけ皆、魔物を恐れているということです。それに……しよせん貴女達は英雄とはいえ亜人だ」

人ではない。自分達とは違う存在——だから簡単に受け入れることができる。

「違う！ そんなことない！ 貴方が……貴方が何かを吹き込んだからです！ 私達が亜人かどうかなんて……関係ない！」

信じたくなかった。

「貴女がそう信じたいのなら信じればいい。貴女が何を思おうが、私はすべきことを粛々とするだけです。さあ、貴女にも子を産んでもらいますよ。まずは……私の種からだ」

バガルドが自身の下半身を露わにする。猛々しく勃起した肉棒の先端部をフェリアへと向けてくる。

「や……やめなさい！ それは……それはやめて！ 殺す。殺しますよ！ 殺されたくない

ければやめなさい！ 斬られたくなければ！」

「斬られるのはいやですなあ。ですが、今の貴女にそれはできない。くくく……殿下ではなくて申し訳ありませんが……いきますよ」

「駄目！ 駄目えええっ！」

フェリアは絶叫する。

が、そうしたところでバガルドは止まらない。止まってはくれない。

グジュツと肉先を膣口に押しつけ――

どじゅぽっ！ どじゅっ！ どじゅずうう！

「ふぎっ！ くひいいいいっ！」

ブチブチと容赦なく処女膜を破り、フェリアの膣奥まで肉棒を挿入してきた。

（あ、ああ……挿入してる。私の膣中に……男のものが……殿下以外のものがあ……）

身体だけではない。心まで引き裂かれていくような気分だった。

「くううう。なかなかいい締めつけですよ。すぐに射精そうなくらいだ。どうですか？

女になった気分は？」

宰相が女騎士を嘲笑う。

「だ……黙りなさい！ こんな……最悪です。最悪以外の何もでもない！ 早く……

早く……こ、これを抜きなさい！」

正直なことを言うと、泣きたかった。涙を流し、カールラントに謝りたかった。

が、その感情を押し隠す。敵の前に弱った姿を見せるわけにはいかない。

「処女を奪われてなおその態度。流星は我が国最高の騎士だ。実にそそります。そんな貴女を自分のものにはできなかった。何事にも代えがたい喜びを感じますよ」

「わ……私は……貴方の……ものになど……。早く抜きなさい！ 私の身体が穢れますよ！」
鋭く瞳を細め、バガルドを睨む。

「怖い顔ですな。とはいえ、いつまでそんな顔をしていられるか……楽しみですよ」
どんな目で睨んだところでバガルドは止まらない。それどころか、嬉々として――

ずっじゅ！ どじゅうっ！

「ふっぎ！ ぎひいいい！」

更にフェリアの膣奥に肉棒を突き込んできた。

*

「いぎゅっ♥ また……またいぎゅっ！ また……またしゃせーしにやがら……しゃしえ

ーしゃせられながら……わだひ……いぎゅっ♥ いぎゅいぎゅ……いぎゅううっ♥」

どびゅばっ！ びゅぶるるうっ！

膣奥に肉汁を流し込まれながら、肉汁を搾られつつリナは達する。これで一体何度目の絶頂なのか？ もうさっぱり分からなくなっていた。

「さっきからリナちゃんと言ってる射精ってどういうことだ？」

「リナさんって女の子だよな？」

そんなリナの痴態を見つめる周囲の人々がそんなことを語り始める。

「ああ、そういうえば四つん這いになってるせいでみんなにはあそこが見えないのか。それじゃあ、サーブスで見せてやるとするか」

するとリナを犯す兵士がそんなことを呟いた。

「へ？ あ……だ……駄目……それは……おっおっ……しょれだけは……やめて……やめてくぢしゃいい！ お願ひ。おねがいでしゅからあ」

瞬間、血の気が引いていく。

こんな身体を皆に見せるなんて、絶対に嫌だった。他の人々とはまるで違う醜い身体……。そんなものを見られるなんて耐えられない。

だからリナは許しを請う。涙を流し、鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながら兵士に懇願する。

「そんな顔されると……なんだか胸が痛むなあ」

「だ、だつたら……」

一瞬希望が生まれた。

「でも……そういう顔見るの好きなんだよね」

だが、それは一瞬でしかなく、兵士はリナの両手を拘束していた鎖を外すと、肉棒を挿入したまま少女騎士の上半身を無理矢理引き起こしてきた。

「あ……あああ！ あああああああつ!!」

当然、これまで隠れていた下腹部が皆の前に露わとなる。ガチガチに、痛々しい程に、勃起したペニスが……。

「お……嘘……あれ……ちんこか？」

「まじかよ。あんな可愛い子のあそこに……あんなでかいのがついてるのか？」

「亜人って……やっぱ人じゃね〜んだなあ」

衆目にふたなりペニスが晒される。

「やだ！ あああ！ やだ！ 見ないで！ 見ないでくださいいいいいいい！」

皆の言葉が胸に突き刺さる。恐怖すら覚えてしまう状況だった。

慌ててリナは腰を振る。腰を振りつつ、尻尾であそこを隠そうとする。けれども腰を振ったところで逃げられない。尻尾も背中と男の腰に挟まれて上手く動かすことができない。

「見ないでじゃないだろ。ほら……見せてやるんだ。みんなの前で射精してやるんだよ」

その上で、男は肉棒を抜いてきた。

じゅこつじゅこつと容赦することなく……。

「おっひ！ くひいいっ！ 駄目！ あああ！ やだ。やだ！ やだやだやだやだやだあ

ああ！ おおおお！ 擦っちゃあ！ こしゅっちゃやだあ！ 射精ちやう！ これ……射精

ちやう！ 射精ちやうう」

散々快感を刻み込まれたペニスは数度擦られただけですぐに射精しそうになってしまう。耐えることなどできなかつた。

「いいよさあ、射精して！ 射精して！」

「やだ……たしゆけて！ 誰か……フェリアしゃま……アルトしゃ……ん……誰か……誰かああ」

救いを求めるように周囲に視線を移す。

だが、視界に映った仲間達は――

「いぐっ♥ いぎゅうううっ♥」

「もう……貴方でいい♥ 貴方でいいから……種付けして。孕ましてえええ♥♥♥」
皆、愉悦に堕ち始めていた。

男達の動きに合わせて愉悦の悲鳴を漏らしていた。誰も、誰もリナを救える者などいなかった。

「ああ……たしゆけて……だじゆげでええ」

だから今度は自分を見つめる人々に救いを求める。お願いです。お願いですから助けて下さいと訴える……。

「さあ、射精してみせてリナちゃん」

「女の射精……楽しみだなあ」

が、リナに対する慈悲を向けてくれる者などどこにもいなかった。
顔を背けている者も中にはいるけれど、救おうとはしてくれない。

「これは……国の為だから……」



あまりの気持ちよさに、再び失禁さえしながら、フェリアは肉悦に肢体を震わせた。

（もう……はっひ……あひひ……ろうれもいい……。にゃにも……にゃにもかんがえられにゃひ……あっひ……ふひひ……あひいいい……）

必ず受精させるとでもいう様に、最後の一滴を撃ち放つまで挿し込まれ続ける肉棒に、身悶え続けながらフェリアは――

「は……はへええええ♥」

口元に壊れた笑みを浮かべた。

*

一ヶ月後――

騎士達が押し込められた牛舎の前には、多数の民達が集まっていた。

彼らは期待の眼差しで、牛舎の中に繋がれた亜人騎士達を見つめる。

アルトやリナ、それにノンといった騎士達は、数ヶ月前と変わらず、全員全裸で四つん這いという状態だった。

ただ、捕らえられたばかりの頃とは違い――彼女達の下腹部は一目で分かる程に膨れ上がっていた。

そう、全員妊娠しているのである。

そして今――

「お……う……うま……おっおっおっ！　うま……れりゅ！　わひの……わひの赤子が……

「……生まれりゅううう」

出産が始まる。

「腹が……おとお！ わひの……はりやが……破れてしまいそうじゃああ」

ぶしゅっ！ ぶじゅっ！

ノノンの少女の様な秘部が内側から口を開く。膣口から多量の愛液が溢れ出した。

「わ……たしも……私もですうう！ ふっひ！ くひいいい！ 動いてる……お腹の中で

……あ……か、ちゃんが……あっあっ……うご……いでりゅううう！」

「オレも……オレ……もだ！ おっおっ……ふほおおお！ 開く……まんこが開いて……

オレの……赤ちゃん……で……て……くるううう！ ふっほ！ んほおおおっ！！」

ノノンだけではない、アルトやリナの陰部までクパッと内側から大きく口を開いた。

そんな三人の反応に引かれるように――

「ぼ……くも！ うまれ……産まれりゅ！ うまれりゅううう！」

「しゅ……ごひっ！ これ……しゅっごひいいい！ 広がる……あかひやんで……あだひ

の……まんこがひろげられでりゅううう♥ ふっほ……むほおおおおおお♥♥♥」

他の騎士達も悶え始めた。

集まった人々に見せつける様に、全員の膣口がクパッと開く。

分泌される愛液量は、失禁でもしているのではないかと思える程だった。

「ふほ……おとおお！ こわ……れる……わじ……ごわれでじまううう！ おっおっお

っ！ まんこが……ぐしゃぐしゃになりゅうう！」

「頭が……頭が変になりそうだああ！ 裂ける……ふっひ……んひいいい！ オレの……オレのまん……こが裂けちまいそうだあああ！」

「でも……ふひ……んひいいい！ きも……気持ち……いっひっ！ 私……感じてる！ 感じちゃって……ま……まじゅうううう！ 身体……かりやだ……こわれちやいぞうなのに……いっひひ！ ぎもぢいひいいい！」

気持ちいいという言葉を実証する様に、身悶えながらリナは肉棒を痛々しい程にいきり勃たせる。

散々犯され続けてきた彼女達の肉体は、既に出産という行為にすら性感を覚える程に開発され尽くされてしまっていた。

「ふっほ！ むほおお！ ひっひっひっ……ふひいいいいい♥♥♥」

「ひっひっふううう！ ひっひっふううう♥」

「はへー♥ はへー♥ はへああああ♥♥♥」

どじゅ！ むじゅぽっ！ どじゅぶっ！ じゅぽっ！ みりっ！ みりみりいいい！

荒く、それでいて甘い吐息と共に、肉穴が不気味な程に開いていく。

これを見つめる人々から「頑張れ！」「もうすぐ産まれるぞ！」「ほら、もつと息め！」「いぞお」と応援の声が向けられる。

その声を耳にしつつ、騎士達は息む。性感に身悶えながら……。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

電子書籍も配信中!



二次元 DREAM MAGAZINE DREAM MAGAZINE

隔月
発売

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!



隔月
発売

大人気PCゲームのコミック多数連載!



電子版は毎月配信!
書籍版は偶数月発売!

COMIC UNREAL

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。